八―一　工芸者の時代から技術者の時代へ

一八世紀の中葉にイギリスではじまった産業革命とは、エネルギーの革命でもあった。この転換はそれまでの農業社会中心の生活から、都市における工業機械の製造と、それによって産みだされた工業製品があふれる都市型産業社会への移行を加速させた。欧州諸国の工業は、工業制手工業から工場制機械生産体制へと変化をとげて、モノの大量生産を可能とした。

大量生産は労働現場の分業化によって成立する。分業化は単純化された個々の生産過程を、連結した有機的なシステムとして構築し、工業製品を大量に産みだし、コストの低減と生産の効率化という果実をもたらした。

このような産業基盤の確立と進展に合わせて、印刷関連の機械も年を追うごとに改良がなされて、印刷の精度と速度が飛躍的に高められた。そして印刷の中枢を占める活字製造も、手工業から工場制産業に組み込まれて大量生産されるようになった。つまり産業革命は、活字の品質と精度、書体の設計にまでおおきな影響を及ぼしていた。

*

わが国に近代的な金属活字を用いるタイポグラフィ（書物形成法）が伝来したのは遅れた。それはヨーロッパにおける産業革命の果実として開国にともなって招来されたが、同時にその矛盾もひそかに内包して、幕末から明治の最初期という一九世紀の中葉にもたらされた。

最初に開港地の長崎で本木昌造（一八二四―七五）らのグループによる揺籃期をすごしたタイ

ポグラフィは、一八七二年（明治五）七月同地から平野富二（一八四六―九二）らの集団が上京して、東京築地二丁目に本格的な活字鋳造所（平野活版所・のちの東京築地活版製造所）をつくったときから出発した。平野富二はまた一八七六年（明治九）石川島平野造船所を創業して、現在の石川島播磨重工業株式会社に継承されている。

本木昌造と平野富二はともに、かつては徳川幕府による長崎製鉄所の高級官僚であった。ふたりとも当初は海外からもたらされた金属活字が、ヨーロッパの歴史のなかではどのような位置と性格を占めるのかということは考えなかった。かれらは知的に考えるよりも先に、美的に、直観的にタイポグラフィの精緻な構造に感動した。

ついで考えるよりも先に、

「これからのわが国の活字と書物は、こうあらねばならぬ」

と思いさだめて、それに向かってともかく猛進した。それが、わが国のタイポグラフィにおおきな変革をもたらした。

とりわけ長崎から東京に、まるで祭礼にでも出かけるような賑やかさで進出してきた平野富二らの若者たちには、明治の愉快なまでの明るさがみられた。ときに平野富二、二六歳。口もとにまだ稚さをのこした年齢でもあった。東京ではまた、タイポグラフィの戦線にあらたな同志として秀英舎・佐久間貞一らも加わった。このとき佐久間貞一もまた、春秋に富んだ青春のときでもあった。

かれらは日本の進むべき道を、西欧列強諸国の産業革命に倣（なら）って、ともかくがむしゃらに産

業立国をめざし、近代産業国家をつくりあげようと夢想した。それはまた、あどけないほど素朴な明治の「殖産興国」のこころでもあった。

かれらが武器としたのは言論であった。その視覚伝達における定着した形態が、新聞であり、書物であり、雑誌であり、それを支える鉛の弾丸としての活字であった。それをもってかれらは自由と民権を論じ、近代産業国家をつくりあげようとした。そうした試みの結果として、明治憲法が公布され、国会が開設され、あらたな産業が勃興した。かれらの武器は鉛の弾丸としての活字であった。

ところがタイポグラファとしてのこれらの先駆者たちを評価すると、かれらはみな重要な点を見落としていた。すなわちヨーロッパ諸国、なかんずくイギリスではもはや産業革命は成熟しており、商業活動が急速に活発になって、未曾有の経済成長をとげてゆたかになった時代であった。したがって世界史のなかでも「一九世紀はイギリスの世紀」として記憶されている。

ところが、現代のタイポグラフィ界の一部の識者は、一九世紀を「タイポグラフィにおける悪魔の世紀」と呼んではばからない。

商業の活発化は、文字活字や図像という視覚伝達の手段を覚醒させた。つまり商業印刷物とその業界が本格的に始動をはじめていた。それを支えた技術が多色刷りを可能とした石版印刷であり、それに次ぐオフセット平版印刷の普及であり、写真や図版などの絵画的な情報の発信であった。

そのために言語情報は図像の訴求力と競いあうようになり、活字書体の形象から書物の活字

『Printing 1770–1970』より

一九世紀のイギリスの印刷・広告界の混乱は、現代では想像を絶するものであった。上図は一八三五年、ビラ貼り職人が街頭でビラを競争で貼っている様子。下図は一八七四年駅頭における巨大ポスター。こうした商業広告のなかから巨大なサイズの木製の活字が量産され、サンセリフ体をはじめとするジョブ・タイプも次々と誕生した。しかしこれが書物公版印刷に与えた影響とは必ずしも好ましいものではなく、個人印刷所運動、金属活字改良運動などの動向をまって落ち着きをみせた。

としての判別性と可読性への配慮が忘れられて、誘目性ばかりが重くみられるようになり、特大サイズの木活字がその需要を受けて盛んに製造された。

金属活字にもその影響が及んで、誘目性を重くみたディスプレイ書体が続々と誕生した。たとえば、文字のなかに花柄や図像を埋め込んだ装飾書体、白と黒を反転させた活字書体、ファット・フェイスと呼ばれた肥満体の書体、そしてついに、わが国ではゴシック体と呼ばれるサンセリフ体が、グロテスクという醜悪な名前を与えられて登場した。これらはすべて一九世紀のできごとであった。

すなわち一九世紀の初頭から、タイポグラフィにおける工芸と技芸としての伝統と精神が急速に失われて、合理化・効率化・産業化が進んで、利潤の追求と生産性の向上ばかりが目立つようになっていた。いつのまにか印刷から技芸者の精神は忘却され、活字と書物も算盤づくの商いであり、産業にかわっていた。そしてそれがあたらしい技術（テクノロジー）としてわが国にもたらされたのである。

＊

ところで一九世紀の初頭ともなると、ヨーロッパ諸国はキリスト教の布教を名目として、はるばるアジア諸国に進出してきていた。中国・清王朝がまだ強大なころには海禁政策（鎖国）のためもあってその内懐に入ることができなかった。それでもかれらは植民地獲得のひそかな野望を秘めて中国大陸の周辺部に散会して、まず自らの言語習得のための辞書づくりと、布教のための聖書の刊行を目論んだ。

左図
『印刷雑誌』昭和一二年三月号に登場した藤田活版製造所の広告には、ニュー・スタイルの欧文活字を使った印刷物を、ヨーロッパに送ることは問題があるとしるされている。井上嘉瑞（よしみつ）（一九〇二―五六）は日本郵船の駐在員としてロンドンにあって、個人印刷所運動と金属活字改良運動に精通していた。

二號細ゴジツク

鉛と錫とアンチの三元合金から成る活字地金は絶對的であり、他の金屬を以ては到底代換し得ざる最高位のものである事實を終に科學が肯定しました。

三號細ゴジツク

倫敦・井上嘉瑞氏ヨリノ通信―本邦デモ漢字ノ細書體ガ流行シ出シテ居ル今日、歐文活字ノ見本帳カラ第一番ニ棄却スベキハ *New Style* デセウ少クトモ歐洲向ケノ印刷物ニハ絶對ニ之ヲ使フ事ハ不可デス。

四號細ゴジツク

校　正

筆談云、宋宣獻傳、喜藏異書、皆手自仇校、常謂、校書如掃塵、一面掃、一面生毎三四校、猶有脫誤、（事文類聚）

植　字

書三寫、魯爲魚、帝爲虎（抱朴子）

書經三寫、烏焉成馬（佩文韻府）

藤田活版製造所

秀英体研究　サンプルPDF

『秀英体研究』についてのお問い合わせ

大日本印刷株式会社
C&I事業部IT開発本部　秀英体プロジェクト（担当：伊藤・佐々木）

E－Mail ： shueitai@lab. cio. dnp. co. jp
tel ： 03－5269－5657
fax ： 03－5269－6023

© Jiro Katashio 2004